東北大学中国語学文学論集　第1号

『李笠翁批閲三国志』について

中川　諭

序

明代になって登場した白話長編小説は万暦年間以降になると流行を極め、それにともなって評論の対象として議論されるようになる。特に人気の高かった作品であればあるほど、その傾向は強くなるのも想像に難くない。むろん『三国志演義』もその一つであり、明末期には余象斗の批評をはじめ、「李卓吾評」「鍾伯敬評」と題する批評を有する『三国志演義』の版本が登場する。

清代になると、批評が付けられた『三国志演義』の版本として、まず通行本として現在でも広く読まれている毛宗崗批評本が登場する。そしてそれに続いて『李笠翁批閲三国志』（以下「李漁本」と略称する。）が現れた。この李漁本の版式は半葉十行行二十二字で、封面に「笠翁評閲／繪像三國志／第一才子書」と題し、首巻には李漁の「三國志演義序」・「三國志目録」・「三國志宗寮姓氏」・図像百二十葉（一回分につき一葉）がある。また本文の上段に批評が付けられている。現在北京図書館・京都大学文学部・パリ国家図書館に所蔵される。

この李漁本について、最も早く言及したのは鄭振鐸である。鄭振鐸は「三国志演義的演化」(1)の中で次のように述べている。

> …他（李漁を指す一筆者）這個本子、面目與一百二十回的李卓吾評本完全相同、而分爲一百二十回、每回二目、皆保存原文、並不對偶、每回中也分爲上下二段。惟評語與卓吾的不同。在文字上、笠翁對於原本也略略有些更動、惟較毛本爲少。例如、關於曹操爲關羽鑄壽亭侯印一節、便完全依據於原文而不從毛氏的所改。但如劉備畏雷失　的一節便又捨棄原文而改用毛氏的改本。他似是在原文與毛本之間、時時擇善而從。不過大體面目以及文字、仍是保全着眞實的『古本』的本色耳。

鄭振鐸は李漁本の特徴として、百二十回仕立てで各回が二則に分かれるなど外見は李卓吾評本と同じであること、批評は李卓吾評本と異なること、そして「曹操、関羽に寿亭侯印

を鋳する」の一節は「原文」の通りだが、「劉備が雷を恐れて箸を落とす」の一節は毛宗崗本の本文に従っている点から、李漁本の文章は「原本」をいくらか改めていて、「原本」と毛宗崗本の間に位置するものであるが、常によりよい方の文章に従っていること、を指摘している。

小川環樹博士は「『三国演義』の毛声山批評本と李笠翁本」(2)の中で、李漁本の序文・毛宗崗本の原刻本であろう「酔耕堂本」に付されている李漁の序文（康熙十八年十二月の年月が記されている）によって、李漁本の刊行の前にすでに毛宗崗本が完成していたこと、李漁本の表題である「第一才子書」の名を毛宗崗本に与え、李漁の序を利用して金聖嘆の序文を偽作したのは後世の書賈であろうと述べる。(3)そして李漁本そのものについては、康熙十八年より何年か後の出版であろうこと、鄭振鐸が言うとおり李漁本には毛宗崗本を参考にした形跡があることを指摘している。

また黄霖氏は「関於《三国》鍾惺与李漁評本両題」(4)において、李漁本の本文は『李卓吾先生批評三国志』を底本にし毛宗崗本を参照して修訂したものであることを指摘し、李漁本の批評の作られ方、李卓吾評と毛宗崗評との関係を述べる。そしてこうした批評の作られ方などから、李漁本は李漁自身の手によって編纂されたものではないと述べている。

以上三者とも李漁本の成立は『三国志演義』の通行本である毛宗崗本の成立後であり、底本に対して毛宗崗本を参照して修訂したものである、という点についてほぼ同様の見解である。この点に関しては筆者もまた特別異論があるわけではない。しかし李漁本の底本がいかなる版本であるかについてはいまだ明確に示されているわけではない。また李漁本がどの程度毛宗崗本を参照したのか、そして批評についてはどうなのか、など李漁本と毛宗崗本の関係についても、従来の研究では不十分で、いまだ詳しい様相は明らかではない。

本稿は、以上のような問題意識の上に立って、李漁本と李卓吾評本・毛宗崗本を比較検討して、李漁本がいかにして編纂された版本であるかを考察していこうとするものである。

一

まず李漁本はどのような版本を底本にしてできたのかということを確認しておこう。

『三国志演義』の諸版本はその文章・内容の違いから大きく次の三系統に分けられる。

一、二十四巻系諸本

①十一の挿入説話なし

②十一の挿入説話あり

二、二十巻「花関索」系諸本

三、二十巻「関索」系諸本

このうち一の「二十四巻系諸本」は毛宗崗本が成立していく過程に関わる系統であり、いわゆる「関索説話」を含む十一の挿入説話(5)の有無によってさらに二つに分けることができる。そこで李漁本についてその十一の挿入説話を調べていくと、いずれも例外なく確認できる。したがって李漁本は、二十四巻系諸本のうちの②十一の挿入説話の見られるグループに属することが分かる。

二十四巻系諸本の十一の挿入説話があるグループに属する版本には、周曰校本(6)・夏振宇本(7)・『李卓吾先生批評三国志』（以下「李卓吾評本」と略称する）などがある。では李漁本はこれら同じグループに属する諸本とどのような関係にあるのかを見ていこう。なお李卓吾評本は、現存するもののうち最も古いとされる呉観明本(8)を用いる。

諸本の文章を調べていくと、次のような例が見られる。場面は、孫策が袁術に兵を借りて揚州の劉繇を攻めた。孫策は劉繇軍を打ち破った後、さらに秣陵の薛礼を攻めるため、城郭の近くまでやってきた、というところである。（版本間の違いがわかりやすいよう適宜空白を空けた。以下同じ。）

〇李漁本　第十五回　「孫策大戰嚴白虎」

周曰校本	夏振宇本	呉観明本	李漁本
城上張英暗放一冷箭、正中孫策左腿、翻身落馬。衆將急救起還營、拔箭、以金瘡藥傅之。策曰「可詐作吾中箭身死、軍中擧哀、拔寨齊起、必然來追。暗伏奇兵、必捉薛禮。」衆然其計、只説孫策已死、連夜拔寨齊起。薛禮聽知孫策死、連夜便起城内	城上張英暗放一冷箭、正中孫策左腿、翻身落馬。衆將急救起還營、拔箭、以金瘡藥傅之。策曰「可詐作吾中箭身死、軍中擧哀、拔寨齊起、必然來追。暗伏奇兵、必捉薛禮。」衆然其計、只説孫策已死、連夜拔寨齊起。薛禮聽知孫策死、連夜便起城内	城上張英暗放一冷箭、正中孫策左腿、翻身落馬。衆將急救起還營、拔箭、以金瘡藥傅之。策曰「可詐作吾中箭身死、軍中擧哀、拔寨齊起、薛禮聽知孫策死、連夜便起城内	城上張英暗放一冷箭、正中孫策左腿、翻身落馬。衆將急救　還營、以金瘡藥傅之。策曰「可詐作吾中箭身死、軍中擧哀、拔寨齊起、薛禮聽知孫策已死、連夜便起城内

之軍。張英・陳横殺出城來追。	之軍。張英・陳横殺出城來追之。	之軍。張英・陳横殺出城來追之。	之軍。張英・陳横殺出城來。

周日校本と夏振宇本には内容に違いはなく、いずれも、城内から矢が飛んで来て孫策の左の太股にあたり、孫策は本陣に帰って手当をする、そして自分が死んだという噂を流して敵を欺く。薛礼は孫堅が死んだという知らせを聞いて城から撃って出た、となっている。しかし呉観明本では、周日校本・夏振宇本にはみられる「必然来追。暗伏奇兵必捉薛礼。衆然其計、只説孫策已死、連夜抜寨斉起。」の二十八文字が見られない。呉観明本で脱落している二十九文字は孫策のセリフの途中から地の文にかけての部分であり、呉観明本のような文章のままでは当然意味をなさない。しかもその二十九文字は二度出てくる「抜寨斉起」に挟まれた部分であるから、呉観明本の脱誤に相違あるまい。そこで李漁本のこの個所を見ると、呉観明本にあった二十八文字の脱誤をそのまま踏襲し、文章が通じなくなっている。このように李漁本には李卓吾評本の誤りを踏襲している個所がいくつも見られる。したがって李漁本の文章は周日校本や夏振宇本よりも李卓吾評本に近いと考えられる。

もう一例挙げてみよう。曹操が死に、曹丕が魏王の位を次ぐと、さまざまな瑞兆が現れたので、曹丕配下の群臣たちは魏が漢に取って代わる徴だと話し始め、魏の重臣たちも漢の献帝に譲位を迫ろうとする、という場面である。

〇李漁本　第七十九回　「漢中王怒殺劉封」
　　　　　第八十回　　「廢獻帝曹丕簒漢」

周日校本	夏振宇本	呉観明本	李漁本
這一班文武官僚四十餘人、皆　來見太尉賈・・相國華糧・御史大夫王朗、共言此事。賈・笑曰「公等所見、正合吾機。」當日華糧 引文武	這一班文武官僚四十餘人、皆　來見太尉賈・・相國華糧・御史大夫王朗、共言此事。賈・笑曰「公等所見、正合吾機。」當日華糧 引文武	這一班文武官僚四十餘人、皆　來見太尉賈・・相國華糧・御史大夫王朗、共言此事。賈・笑曰「公等所見、正合吾機。」當日華糧同賈・・王朗・中郎將李伏・太史丞許芝、引文武	一班文武　　四十餘人、一齊來見太尉賈・・相國華糧・御史大夫王朗、共言此事。賈・笑曰「公等所見、亦若此乎。」當日華糧同賈・・王朗・中郎將李伏・太史丞許芝、引文武

多官、　　　　來	多官、　　　　來	多官、直入内殿來	多官、直入内殿來
奏漢獻帝、　禪位	奏漢獻帝、　禪位	奏漢獻帝、　禪位	奏　獻帝、請禪位
於魏王曹丕。未知	於魏王曹丕。未知	於魏王曹丕。未知	於魏王。　　未知
如何、且聽下回分	如何、且聽下回分	如何、且聽下回分	如何、且聽下回分
解。	解。	解。	解。
（改則）	（改則）	（改則）	（改則）
却説、賈・・華糨	却説、賈・・華糨	却説、　　　華糨	却説、　　　華糨
・王朗同中郎將李	・王朗・中郎將李		
伏・太史丞許芝、	伏・太史丞許芝、		
引文武官僚、直入	引文武官僚、直入	引文武	引文武
内殿、來見獻帝。	内殿、來見獻帝。	來見獻帝。	來見獻帝。
華糨奏曰「伏覩魏	華糨奏曰「伏覩魏	糨奏曰「伏覩魏	糨奏曰「伏覩魏
王自登位以來、布	王自登位以來、布	王自登位以來、布	王自登位以來、布
德四方、仁及萬物	德四方、仁及萬物	德四方、仁及萬物	德四方、仁及萬物
、越古超今、雖唐	、越古超今、雖唐	、越古超今、雖唐	、越古超今、雖唐
虞、無以過此。	虞、無以過此。	虞、無以過此。	虞、無以過此。

引用個所、周曰校本・夏振宇本は巻八にある。呉観明本は李漁本と同じく第七十九・八十回。改則の個所を挟んで、華糨が賈・・王朗・李伏・許芝が多くの文武官を連れて献帝に曹丕に位を譲ることを迫るという内容については四本とも同じであるが、その文章は周曰校本・夏振宇本と呉観明本・李漁本とで異なっている。すなわち、周曰校本・夏振宇本では賈・・王朗・李伏・許芝の名前が改則の後になって出てきているが、呉観明本・李漁本ではその四人の名前は改則の前に出てきている。もちろんこのことによって文意が通じなくなるということはないが、二十四巻系諸本の中で李卓吾評本は周・夏本より版本が変遷していく過程における段階が遅れるのであるから、(9)おそらくこれは李卓吾評本の段階での文章の書き改めであろう。そして李卓吾評本で書き改められた文章を李漁本はほぼそのまま受け継いでいるのである。したがってこの例からも李漁本は周曰校本・夏振宇本よりも李卓吾評本に近い関係にあると考えられる。

以上の二例から、李漁本が李卓吾評本を底本にしたということが認められる。

二

書名を『李卓吾先生批評三国志』と題しているテキストには、呉観明本の他緑蔭堂本・藜光楼本が現存している。それでは李漁本はこれらの李卓吾評本のうちのどれを底本としたのであろうか。しかしその前に呉観明本・緑蔭堂本・藜光楼本の先後関係を明らかにしておく必要があろう。

呉・緑・藜三本の版式はみな半葉十行行二十二字で等しく、版面も三本とも全体にわたって酷似しており、これら三本のいずれかの版本の覆刻によって他のいずれかの版本ができあがったと考えられる。(10) したがって三本間のわずかな文字の違いに着目して三本間の関係を探っていかねばならない。版式が酷似している前提のもとでは、わずかな文字の違いも三本間の関係を探る根拠になり得るだろう。そこで呉・緑・藜三本を比較したときにみられる文字の違いを次に列挙し、あわせて李漁本の該当部分も挙げる。ただし用例は、資料閲覧の関係上、藜光楼本を詳細に調査し得た第六十一回から第百二十回の間に限る。(11)

	回	呉観明本	緑蔭堂本	藜光楼本	李漁本
①	64	可令張翼呉懿引趙雲撫外水定江竿爲等處所屬郡	可令張翼呉懿引趙雲撫外水定江竿爲等處所屬郡	可令張翼呉懿引趙雲撫・水定江竿爲等處所屬郡	可令張翼呉懿引趙雲撫外水定江竿爲等處所屬郡
②	66	左将軍親冒矢石戮力破破敵	左将軍親冒矢石戮力□破敵	左将軍親冒矢石戮力□破敵	左将軍親冒矢石戮力破敵
③	68	操取觀之一字不差	操又讀之一字不差	操又讀之一字不差	操取觀之一字不差
④	69	截住城内救軍	截住城内救軍	截住城向救軍	截住城内救軍
⑤	69	勿似董承自取其禍	勿似董承自收其禍	勿似董承自收其禍	勿似董承自取其禍
⑥	79	所有臨・侯曹植	所有臨・疾曹植	所有▪・疾曹植	所有臨・侯曹植
⑦	80	幸主公有兩川之地	今主公有兩川之地	今主公有兩川之地	幸主公有兩川之地
⑧	90	見火必着	見火必着	見火必燃	見火必着
⑨	99	自有解危之策	自有解危之策	目有解危之策	自有解危之策
⑩	100	願去者百餘人	願去者千餘人	願去者千餘人	願去者約千餘人

⑪	100	文官秉筆而記録	史官秉筆而記録	史官秉筆而記録	史官秉筆而記録
⑫	102	汝二人各引百百軍	汝二人各引百十軍	汝二人各引五百軍	汝二人各引五百軍
⑬	105	于法當斬之	于法當斬之	於法當斬之	于法當斬之
⑭	109	何必效耿恭故事乎作演義者…	何必效耿恭故事此作演義者…	何必效耿恭故事此作演義者…	
⑮	114	如王經老母談笑而死	如王經者母談笑而死	如王經者母談笑而死	
⑯	119	付託不專必参枝族	何託不専必参枝族	何託不専必参枝族	

⑭・⑮は回批の中の部分であり、⑯は「史臣日～」で始まる後世の歴史家の賛の中の部分である。どれも『三国志演義』の本文ではなく、李漁本に該当する個所はない。

以上の十六項目について、若干の考察を加える。

① 呉観明本の「外水」を、『李卓吾先生批評三国志』に先立つに違いない周曰校本は(12)「永水」に作る。ここは「永水」・「定江」・「竿為」と三つの地名が並ぶところであり、したがって呉・緑・藜三本とも誤りであろう。しかし字形から考えるに、「外」に作る呉観明本・緑蔭堂本のほうが藜光楼本よりも古い形であり、「外水」では地名として不適切なので、藜光楼本で「外水」を「・水」に改めたのであろう。

② 呉観明本では「破」一字が衍字である。そのため緑蔭堂本・藜光楼本ではその一字を削ってその一字分が空白になっている。

③ 周曰校本は呉観明本同様「取觀」に作る。この場面は左慈が魔力を使って『孟徳新書』を取り出し曹操に見せるところで、この直前に左慈が曹操に書物ないしは文書を見せることはない。したがって呉観明本の方が緑蔭堂本・藜光楼本よりも古い形と考えられる。

④ 藜光楼本の字の誤り。当然「城内」でないと読めない。

⑤ 周曰校本は呉観明本同様「自取」に作る。緑蔭堂本・藜光楼本のように「自収其禍」のままで読めなくはないが、ややぎこちない表現か。

⑥ 当然呉観明本が正しい。緑蔭堂本・藜光楼本では「侯」の字の異体字「▪」の字を「疾」の字に誤ったに相違あるまい。藜光楼本はさらに「臨」字を誤る。

⑦ 周曰校本は呉観明本同様「幸」に作る。呉観明本のままでも緑蔭堂本・藜光楼本のままでも文意は通じる。

⑧ 周曰校本は呉観明本・藜光楼本同様「必着」に作る。呉観明本・緑蔭堂本のままで

も藜光楼本のままでも文意は通じる。

⑨　藜光楼本の字の誤り。

⑩　周曰校本は緑蔭堂本・藜光楼本同様「千餘人」に作る。この部分の直前には「内有百餘人」という句があり、呉観明本はこれに引きずられて誤ったものか。

⑪　周曰校本は緑蔭堂本・藜光楼本同様「史官」に作る。「文官」でも「史官」でも文意は通じる。

⑫　周曰校本は藜光楼本同様「五百軍」に作る。

⑬　呉観明本・緑蔭堂本のように「于」でも藜光楼本のように「於」でも特に問題はない。ただし李卓吾評本では「於」の字よりも「于」の字の方が多用される傾向にある。

⑭　緑蔭堂本・藜光楼本のままでも読めなくはない。しかし呉観明本のように「何～乎」の語句の呼応のある形の方が読みやすい。

⑮　緑蔭堂本・藜光楼本の字の誤り。

⑯　緑蔭堂本・藜光楼本の字の誤り。

また以上十六項目を文字の異同によって整理すると、次の三類に分けられる。

a　呉観明本と緑蔭堂本が等しく、かつ藜光楼本が呉観明本・緑蔭堂本二本と異なる。
　①・④・⑧・⑨・⑬

b　呉観明本が緑蔭堂本・藜光楼本と異なり、かつ緑蔭堂本と藜光楼本が等しい。
　②・③・⑤・⑥・⑦・⑩・⑪・⑭・⑮・⑯

c　呉観明本・緑蔭堂本・藜光楼本三本とも異なる。
　⑫

a類、特に④・⑨のような藜光楼本の明らかな誤りがあることからすると、藜光楼本に先だって呉観明本・緑蔭堂本が存在したと考えられる。またb類、特に⑮・⑯のような緑蔭堂本・藜光楼本の明かな誤りがあることからすると、緑蔭堂本・藜光楼本に先だって呉観明本が存在したと考えられる。そして、呉観明本と藜光楼本が等しくかつ緑蔭堂本が呉観明本・藜光楼本と異なるという例はない。以上のようなことから、少なくとも呉観明本・緑蔭堂本・藜光楼本の三本に限ると、この三本は呉観明本→緑蔭堂本→藜光楼本という三段階の関係にあると考えられよう。(13)

さて李漁本では李卓吾評本三本で相違している文字の違いをどのように作っているのだろうか。先の表の⑭⑮⑯を除く十三例を見ると次のようになっている。

(1) 李漁本が呉観明本のみと同じである場合…………③⑤⑥⑦

(2) 李漁本が呉観明本・緑蔭堂本と同じである場合…①④⑧⑨⑬

(3) 李漁本が緑蔭堂本・藜光楼本と同じである場合…⑩⑪

このうち(1)だけからすると、李漁本は呉観明本と近い関係にあると考えられる。また(3)からは、李漁本は緑蔭堂本や藜光楼本に近いと考えられる。つまり李漁本の底本となった李卓吾評本は呉観明本に近い部分と緑蔭堂本・藜光楼本に近い部分とを持っていることになる。この(1)と(3)が同時に成り立つようなテキストというのは、呉観明本と緑蔭堂本の間の段階に位置する本でなければならない。先に述べたように、呉観明本・緑蔭堂本・藜光楼本の三本は直接の継承関係にはないけれども、呉観明本→緑蔭堂本→藜光楼本という三段階が想定できた。李卓吾評本は呉・緑・藜三本だけではなく、その他にもいくつかが存在していたに違いあるまいから、呉観明本と緑蔭堂本の間の段階に位置する李卓吾評本を想定することは可能であろう。李漁本はこのような呉観明本と緑蔭堂本の間の段階に位置する李卓吾評本を底本としていたのである。そしてこのような性質の本であれば、先の(2)の①④⑧⑨⑬のように緑蔭堂本以降の段階で書き改められた（あるいは誤った）個所は当然呉観明本・緑蔭堂本と同じになろう。

ただ先の表の②については、呉観明本に明らかな衍字があり、緑蔭堂本・藜光楼本では衍字を削って一字分空白にしている。李漁本も衍字を取り去っている。この衍字を削る訂正はどの段階でも容易に行いうるものであり、特に問題点として取り上げる必要はなかろう。⑫については、李漁本は呉観明本とも緑蔭堂本とも異なっており、かつ藜光楼本とのみ同じになっている。そして藜光楼本のように「五百」に作るのが正しい。しかし⑫の個所は、そのすぐ後に「汝二人」（張虎・楽▪）がそれぞれ兵五百を率いて出陣したという描写があるので、「百百」・「百十」ではなく「五百」であることはおおよそ見当がつくのである。したがって李漁本の底本となった李卓吾評本でもこの個所を誤っていたかもしれないが、だとすると李漁本の段階でその誤りを正したのだと思う。

三

以上で李漁本が李卓吾評本の中の一本を底本にしていたことが確かめられた。李漁本は、鄭振鐸・小川環樹両氏が指摘しているように、その底本をもとに時折毛宗崗本を参考にして文章を書き改めているところがある。鄭振鐸はその例として第二十一回の「青梅煮酒論英雄」の一則の中の「劉備畏雷失𥮧」を挙げていた。今その個所を呉観明本・毛宗崗本・李漁本で確認してみると、呉観明本では、曹操のその言葉が終わらないうちに雷が鳴り、そして劉備が持っていた箸を落とす、となっている。毛宗崗本はその場面を、曹操の一言に驚いた劉備が箸を落とし、そのときに雷が鳴る、と改められている。そして李漁本は毛宗崗本の改められた本文と同じになっている。(14)

鄭振鐸はこの場面をもとに、李漁本は常に底本と毛宗崗本の本文のよい方を選んでそちらに従っている、と言っているが、果たしてその通りであろうか。たとえば先に挙げた第十五回「孫策大戦厳白虎」の例のように、李漁本は李卓吾評本に見られる脱誤をそのまま踏襲している。もし李漁本の文章が、底本と毛宗崗本とで文章の良い方に従っているのであれば、この部分は脱誤を修訂している毛宗崗本の本文(15)に従っているはずであろう。しかしそのようにはなっていない。そこで李漁本と毛宗崗本の文章を今一度検討し直し、両者の関係を改めて考える必要がでてくるのである。

毛宗崗本の首巻には序文・図像・目録の他、「読三国志法」という毛宗崗本全体にわたっての批評（総批）と「凡例」とがある。この「凡例」には、毛宗崗が「俗本」（毛宗崗本の事実上の底本のことであろう）をもとにいかにして自らの校訂本を編纂したのかということが具体的に述べてある。今「凡例」に従って、毛宗崗がどのように底本を修訂したのか簡単に見ておこう。

一、意味の通じない助辞を正す。
二、底本の記事の誤りを正す。
三、欠くことのできない記事を増補する。
四、『文選』に収録される文章を増補する。
五、各回の題目を対句にする。
六、李卓吾評を削る。
七、圏点・塗抹を削る。
八、周静軒詩を削る
九、作中人物の作る七言律詩を改める。
十、後人による誤った記事を削る。

そしてそのうち第二・三・四・九・十の項目では具体的にどの個所を修訂したのかを指摘している。それは次の各場面である。

二、「昭烈聞雷失筯」・「馬騰入京遇害」・「關公封漢壽亭侯」・「曹后罵曹丕」・「孫夫人投江而死」
三、「關公秉燭達旦」・「管寧割席分坐」・「曹操分香賣履」・「于禁陵廟見畫」・「武侯夫人之才」・「康成侍兒之慧」・「・艾鳳兮之對」・「鍾會不汗之答」・「杜預『左傳』之癖」
四、孔融「薦禰衡表」・陳琳「討曹操檄」
九、鍾繇・王朗「頌銅雀臺」、蔡瑁「題館驛屋壁」
十、「諸葛亮欲燒魏延于上方谷」・「諸葛瞻得・艾書而猶豫未決」

毛宗崗はこれらの場面について底本を大きく書き換えている。そしてこれによって毛宗崗本ではそれ以前のテキストと若干ストーリーの展開に対して変化を来すことになる。

さて一方の李漁本についてこれらの個所の該当部分を見てみると、凡例第二項に挙げられる「昭烈聞雷失箸」を除いて、すべて毛宗崗本の修訂には従わず、李卓吾評本の文章をほぼそのまま踏襲している。つまり李漁本では毛宗崗が改めるべきであるとしている点をほとんど改めていないのである。このことは李漁本が必ずしも毛宗崗本と底本の優れた方に従っているのではないことを示しているのではないだろうか。

次に李漁本の文章がどのように修訂されているのかを見てみよう。例として挙げる場面は、劉備と関羽・張飛は　黄巾賊に襲われていた董卓を助けたが、無役であったため董卓に軽くあしらわれ、董卓のもとを離れて朱儁のもとに投じた。朱儁は劉備たちを丁重にもてなし、共に黄巾賊討伐にあたった。朱儁と劉備は張宝の妖術も破り、賊軍を陽城に追い込んだ。そして朱儁は他のところで黄巾族と戦っている皇甫嵩の様子を探らせに行った、というところである。

○李漁本第二回　「安喜縣張飛鞭督郵」

呉観明本	毛宗崗本	李漁本
朱儁引軍圍住陽城、月餘不下、差人體探皇甫嵩消息。人　回報　　説「皇甫嵩大獲勝捷、　　　董卓連敗數陣、差皇甫　代之、嵩到時、張角已死、弟張梁用王者衣冠葬之。　　皇甫嵩連贏七陣、斬張梁於曲陽之下、差人掘張角棺椁、　　梟首　送往京師、降者十五萬、殺戮者不計其數。朝廷加皇甫嵩　車騎將軍、領冀州牧。一時人皆得官爵。　　　　　武騎校尉曹操　　　　除濟南相、	朱儁引兵圍住陽城攻打、一面差人打探皇甫嵩消息。探子回報、且説「皇甫嵩大獲勝捷。朝廷以董卓屢敗、　命　　嵩代之、嵩到時、張角已死、　張梁統其衆與我軍相拒、被皇甫嵩連勝七陣、斬張梁於曲陽、　發張角之棺、戮尸梟首、送往京師。餘衆倶降。　　　　朝廷加皇甫嵩爲車騎將軍、領冀州牧。皇甫嵩又表奏盧植有功無罪、朝廷復盧植原官。　曹操亦以有功、除濟南相	朱儁引軍圍住陽城、月餘不下、差人體探皇甫嵩消息。人　回報　　　「皇甫嵩大獲勝捷、　　　董卓連敗數陣、差皇甫嵩代之、嵩到時、張角已死、弟張梁用王者衣冠葬之。　　皇甫嵩連贏七陣、斬張梁於曲陽、　發張角之棺、　　梟首　送往京師。餘衆倶降。　　　　朝廷加皇甫嵩爲車騎將軍、領冀州牧。皇甫嵩又表奏盧植有功無罪、朝廷復盧植原官。　曹操亦以有功、除濟南相

已皆　赴去任訖。」朱儁聽説、催促軍馬　攻打陽城。賊勢危急、從賊嚴政刺殺張寶、獻首投降。朱儁遂平數郡、差人進表奏功。	、即日將班師赴任。」朱儁聽説、催促軍馬悉力攻打陽城。賊勢危急、賊將厳政刺殺張寶、獻首投降。朱儁遂平數郡、　上表獻捷。	、即日將班師赴任。」朱儁聽説、催促軍馬　攻打陽城。賊勢危急、從賊嚴政刺殺張寶、獻首投降。朱儁遂平數郡、差人進表奏功。

この場面の三本の文章を比較してみると、呉観明本と毛宗崗本は書かれている内容ほぼ同じであるが、それでもいくらかは違いが見られる。たとえば、張角が死んだ後、呉観明本は「弟張梁用王者衣冠葬之」と張梁が張角を王者の待遇で葬ったとなっているが、毛宗崗本では「張梁統其衆與我軍相拒」と張梁が大勢を率いて我が軍（官軍）と敵対したとなっていて、呉観明本のようになっていない。また皇甫嵩が張梁を斬り張角の墓を暴いて首をはね、首を都に送りつけた後のところ、呉観明本では「降者十五万、殺戮者不計其数。」とあるが、毛宗崗本ではただ「余衆俱降」とあるだけである。さらに毛宗崗本では皇甫嵩が冤罪を被っていた盧植のために朝廷に取りなし盧植をもとの官に戻したという事が書かれているが、呉観明本にはそれがない。こうした呉観明本と毛宗崗本とで異なっている個所について李漁本ではどうなっているのかを見てみると、張角の死後のことについては、李漁本は呉観明本と同じく張梁が張角を王者の待遇で葬ったとなっている。皇甫嵩が張梁を斬った後のことは、今度は李漁本は毛宗崗本と同じくただ「余衆俱降」に作っているだけで、呉観明本のように詳しく書かれていない。また李漁本には毛宗崗本と同様に皇甫嵩が朝廷に盧植を取りなしたということが書かれている。そして引用部分の最後のところ、呉観明本は「差人進表奏功」であるのが毛宗崗本では「上表獻捷」であり、李漁本は呉観明本と同じに作っている。すなわち李漁本の本文は呉観明本同様に作っていたが、途中から毛宗崗本と同じになり、そして再び呉観明本のような文章になっている。このように李漁本は、本文のごく一部に時折毛宗崗本の文章を引用しているだけなのである。

その他、皇甫嵩が張角の墓を暴くところ、ここは李漁本が底本の文章に従っているところであるが、呉観明本は「差人掘張角棺槨」であるのが李漁本では「発張角之棺」となっている。毛宗崗本の該当個所は同じく「発張角之棺」に作っており、李漁本のこの五文字はおそらく毛宗崗本から来たものだろう。こうした例は李漁本の本文中に時折現れる。

もう一つ別の例を挙げてみよう。場面は、司徒の王允は朝廷内で悪逆非道の限りを尽くしている董卓を殺そうとして、養女の貂蝉を用いて董卓と呂布の間に連環の計を仕掛けた。計略はうまく運び、呂布は董卓に疑いを持ち、董卓殺害を決意した。王允は偽りの詔を発し、■塢に引きこもっていた董卓を長安に呼びつけた。董卓は詔を受け取り、母親に挨拶

した後、長安に向けて出発していった、というところである。
○李漁本　第九回　「王允定計誅董卓」

呉観明本	毛宗崗本	李漁本
出塢上車、前遮後擁、數千軍兵、行不到三十里、車下忽折一輪。左右扶住、卓教牽過逍遥玉面馬來、卓整衣上馬。又行不到十餘里、玉面咆哮嘶喊、掣斷轡頭。卓問肅曰「車折輪、馬斷轡、若何。」肅曰「乃太師應紹漢禪、棄舊而換新也。」卓曰「心腹人所見甚明。」次日忽然狂風驟起、昏霧蔽天。卓問肅曰「此何祥也。」肅曰「主公登龍位、必有紅光紫霧、以壯天威耳。」卓曰「吾心腹人所見甚明。」	卓出塢上車、前遮後擁、望長安來。行不到三十里、所乗之車、忽折一輪。卓下車乗馬。又行不到十里、那馬咆哮嘶喊、掣斷轡頭。卓問肅曰「車折輪、馬斷轡、其兆若何。」肅曰「乃太師應詔漢禪、棄舊換新、將乗玉輦金鞍之兆也。」卓喜而信其言。次日、正行間、忽然狂風驟起、昏霧蔽天。卓問肅曰「此何祥也。」肅曰「主公登龍位、必有紅光紫霧、以壯天威耳。」卓又喜而不疑。	出塢上車、前遮後擁、數千軍兵、行不到三十里、車下忽折一輪。卓曰「此何祥也。」肅曰「當更玉輦耳。」卓曰「吾心腹人所見甚明。」教牽過逍遥玉面馬來上馬。又行不到十餘里、玉面咆哮嘶喊、掣斷轡頭。卓又問曰「此何祥也。」肅曰「太師龍飛、凡馬固當驚也。」卓曰「心腹人所見更明。」次日忽然狂風驟起、昏霧蔽天。卓問肅曰「此何祥也。」肅曰「主公登極、必有紅光紫霧、以壯天威、不須疑也。」卓曰「吾心腹人所見明極。」

長安に向かう董卓にさまざまな凶兆が現れるが、李粛（董卓の側近だが功績を認められず、この時は王允に荷担している）は董卓が疑わないよう吉兆であると言いくるめる。三本とも内容は同じであるが、その文章にはいささか違いが見られる。李漁本の文章を呉観明本・毛宗崗本と比べてみると、まず、董卓が▪塢を出発して三十里も行かないうちに、車の車輪が折れる。呉観明本・毛宗崗本ではすぐ馬に乗り変えたことになっているが、李漁本では董卓が李粛に車輪が折れたことの前兆の意味を尋ね、李粛がそれに答えた後董卓は馬

に乗り換える、となっている。また、その後十里あまり行くと、董卓の乗っていた馬が突然大声で嘶き、手綱を引き切った。呉観明本と毛宗崗本では、ここで董卓が李粛に車輪が折れたこと・手綱がきれたことの吉凶を尋ねるが、李漁本では手綱が切れたことの吉兆のみを尋ねている。そしてその董卓の問いに対する李粛の答は、呉観明本・毛宗崗本では「太師が漢の禅を受けて、古きを捨てて新しきに換える」という意味であるとなっているが、李漁本では「太師が龍となって飛ぶので、凡馬は驚いていたのでしょう。」となっている。以上に指摘した個所は、毛宗崗本はその底本である李卓吾評本の文章をほぼそのまま踏襲した上で若干文章を改編しているのに対し、李漁本は呉観明本・毛宗崗本いずれとも異なった文章になっている。李漁本や李卓吾評本とは系統を異にする「花関索」系諸本・「関索」系諸本を含めて、この部分を李漁本のように作るテキストは他にはない。したがってここに指摘した個所は、李漁本における独自の改変に違いあるまい。このような毛宗崗本とも異なる李漁本独自の改変は、李漁本全体を通して数多く見られるものである。

従来の李漁本の研究において指摘されてきたように、李漁本の本文は毛宗崗本の影響を受けていることは確かであろう。しかし毛宗崗本凡例に指摘されているような李卓吾評本の不備やその他の文章の脱落などの誤りを、李漁本は必ずしも毛宗崗本によって修訂しているわけではなく、むしろ底本をそのまま踏襲していることが多い。また李漁本には李卓吾評本や毛宗崗本と異なった文章も多く見られるのである。こうしたことから、李漁本では底本となったテキストに対して、基本的には独自に修訂改変を行っていたと考えるべきなのではなかろうか。そしてその際に毛宗崗本を時折参照することもあったが、それはあくまで底本改変の時のひとつの参考であるに過ぎず、底本の誤りを正すために毛宗崗本を積極的に利用したのではないのである。第二十一回の「青梅煮酒論英雄」の劉備が曹操の言葉に驚いて箸を落とした個所についても、毛宗崗本凡例の指摘に従って毛宗崗本の文章によって修訂したのではなく、文章を修訂していく中でこの個所は毛宗崗本を参照し引用したが、そこがたまたま毛宗崗本凡例で問題にされていたところであったというものなのだろう。

四

李漁本には本文上段に眉批が付けられている。続いてはこの李漁本に付けられた批評について触れてみたい。

李漁本の批評の由来については、すでに黄霖氏が指摘している。黄霖氏は李漁本の批評をその由来から次の四つに分けている。

一、毛宗崗評から書き抜いたもの
二、李卓吾評から書き抜いたもの
三、李卓吾評と毛宗崗評を混ぜ合わせたもの
四、李漁本に独自なもの

そして次のように述べている。

総観全局、其所謂笠翁批語、自作者少、承襲者多、承襲毛本者尤多。

李漁本の批評の由来についてはほぼ黄霖氏が述べているとおりであろう。ただ一点ほど付け加えておくべきことがある。毛宗崗の批評には本文中に小字双行の形で挿入される「挟批」の他、首巻に含まれる『三国志演義』全体に対する批評である「読三国志法」、各回の本文の前に付けられるその回全体に対する批評である「回批」がある。李漁本の批評で毛宗崗評に由来するものは、挟批から書き抜かれる場合が多いが、中には回批から書き抜かれたものも少なからずある。一つ例を挙げてみよう。李漁本第一回、曹操が初めて登場したところで、曹操の若い頃のエピソードの紹介の中、曹操が人物鑑識の目が高い許劭を訪れた場面は、李漁本の本文では次のようになっている。

汝南許劭有高名、操往見之、問曰「我何如人也。」劭不答。又問。劭曰「子治世之能臣、亂世之奸雄。」操忽大笑。

この部分の李漁本の批評に、

子治世之能臣、亂世之奸雄、此時豈治世耶。劭意在後一語、操喜亦在後一語。

とある。毛宗崗本のここに該当する部分の挟批は、「子治世之能臣、乱世之奸雄也。」に対して

二語定評。

とあり、また「操聞言大喜。」に対して、

稱之爲奸雄而大喜、大喜便是眞正奸雄。

とあって、李漁本の批評とは異なっている。しかし毛宗崗本第一回の回批には、

許劭曰「治世能臣、亂世奸雄」、此時豈治世耶。劭意在後一語、操喜亦在後一語。喜得悪、喜得險、喜得無禮、喜得不平常、喜得不懷好意。只此一喜、便是奸雄本色。

とあり、李漁本の批評が毛宗崗本第一回回批のこの部分から引用していることは明らかであろう。

しかし黄霖氏が述べている「自作者少」という点についてはどうであろうか。たとえば、李漁本の第一回だけを見ても、第一則「祭天地桃園結義」には二十三個所に、第二則「劉玄徳斬冦立功」には二十三個所にそれぞれ批評が付けられているが、そのうち毛宗崗本の批評（挟批・回批を含む）から来ている批評は第一則十四個所、第二則七個所であり、ま

た李卓吾評をもとにしている批評はない。また中には第十九回のように、この回全部で四十七個所ある批評のほとんどが李漁本独自の批評になっている回もある。このようなことからすると、李漁本独自の批評は必ずしも少ないわけではないのである。

李漁本独自の批評も毛宗崗本の批評からの引用と同様に多く見られるのであるから、李漁本において批評を付ける場合にも、やはり基本的には李漁本独自で批評を付けようとしたのであろう。この点はその他の『三国志演義』の批評の付けられている版本—鍾伯敬本・余象斗本など—における批評の付け方と何ら変わりはない。ただ李漁本がその他の批評を持つ版本と異なる点は、李漁本が編纂される時期にはすでに『三国志演義』の版本の中でも最も充実した内容を持ち、通行本として後世までずっとその他の版本を圧倒し続けてきた一版本—毛宗崗本—が存在していた。その毛宗崗本の批評の影響はやはり避けることはできなかったのであろう。毛宗崗の批評はそれ以前のどの版本の批評と比べても、質的に優れているのはもちろんのこと、量的にも格段に多い。しかも毛宗崗本の批評は、挟批は小字双行で本文中に挿入されているし、回批は各回の初めにまとめて書かれているので、本文とは容易に見分けがつくものである。したがって批評のみを抜き出すのはそれほど面倒な作業ではないと思われる。新しい修訂本を作りそこに批評を施すにあたって、新たな批評を書き加えていく。その過程の中で、非常に充実した内容を持つ毛宗崗評も取り入れていった。このようにして李漁本の批評は付けられていったのである。

結

以上、『李笠翁批閲三国志』と題する清代に編纂された『三国志演義』の一版本が、どのような先行する版本を底本としていたのか、そしてそれをもとにどのような改変が加えられてできあがったのか、という李漁本が編纂されていく過程を明らかにした。李漁本は『三国志演義』の通行本である毛宗崗本が成立した後の段階において、それ以前にはない新味を持った新しい版本を作ろうとした結果なのだろう。李漁本がその編纂当時最新の版本であったはずの毛宗崗本を底本に選んでいないところにそのことが窺える。ここにすでに読者から好評を得ている作品の一版本を新たに編纂する時の意識の一端が窺われよう。しかしそうした李漁本であっても、いくらかは毛宗崗本の影響を受けないではいられなかった。それだけ毛宗崗本という版本の出現は、清代の『三国志演義』の読者にとって大きな出来事だったのだろう。こうして清代中期以降になると、読者にとって『三国志演義』といえば「毛宗崗批評本」というまでに発展していき、ついには毛宗崗本を除く『三国志演義』の版本は一掃されてしまうことになる。

本稿で取り上げた李漁本は書名に「李笠翁」の名前を掲げている。しかしこの本の本文と批評は、すでに黄霖氏が疑問を述べておられるように、果たして本当に李漁の手になるものであろうか。これについては李漁の文学観・歴史観を詳しく検討した上で明らかにできよう。また李漁本独自の批評に見られる『三国志演義』の読み方も重要な問題であろう。この点は『三国志演義』諸版本に付けられている批評を相互に比較検討していくことにより明らかになろう。このような問題点を解決していくことにより、『三国志演義』の批評史、さらには明清時代の小説の批評史について新たな展望が開けるのではないかと思う。

注

(1)　『小説月報』二十巻十号、一九二九年。

(2)　小川環樹著『中国小説史の研究』（岩波書店、一九六八年）所収。原載は、『神田博士還暦記念書誌学論集』（平凡社、一九五七年）。

(3)　陳翔華「毛宗崗的生平与《三国志演義》毛評本的金聖嘆序問題」（『文献』一九八九年第三期）では、「酔耕堂本」の李漁の序文の全文を挙げ、小川博士とほぼ同じ結論に達している。

(4)　『中国古典小説研究』第一号、一九九五年。

(5)　十一の挿入説話の具体的内容については、中川諭「『三国演義』版本の研究―毛宗崗本の成立過程―」（『集刊東洋学』第六十一号、一九八九年五月）参照。

(6)　新刊校正古本大字音釋三國志通俗演義十二巻。周曰校万巻楼（仁寿堂）刊。北京大学図書館・内閣文庫・蓬左文庫・宮城県図書館伊達文庫（巻九～十二）蔵。

(7)　新刻校正古本大字音釋三國志通俗演義十二巻。夏振宇刊。蓬左文庫蔵。

(8)　序文の末尾に「建陽呉観明刻」とあり、この略称で呼ばれる。北京大学図書館・蓬左文庫・静嘉堂文庫蔵。

(9)　注５前掲拙論参照。

(10)　注５前掲拙論ですでに指摘したように、特に緑蔭堂本には他の本の覆刻であることを示すような例がある。緑蔭堂本の目録で、第百一回第二則の則題は「木門道𦟛射張𧈢」となっている。呉観明本の同じ個所を見ると、「𦟛」は「弩」の刻しまちがいであることがわかる。

(11)　呉観明本・緑蔭堂本は日本国内のいくつかの機関に所蔵されており、また呉観明本はゆまに書房から、緑蔭堂本は台湾の天一出版社からそれぞれ影印本も出版されている。したがってこの二本は容易に詳細な調査ができる。しかし藜光楼本は日本国内に

足本は所蔵されず、影印本も出版されていない。ただし筆者は、復旦大学古籍整理研究所の銭振民氏の御好意により、上海図書館所蔵本の藜光楼本第六十一回から第百二十回までのマイクロフィルムを入手することができた。

(12)　注5前掲拙論参照。

(13)　緑蔭堂本は呉観明本の覆刻、藜光楼本は緑蔭堂本の覆刻であるかどうかについて、まったく否定することはできないが、その可能性は低いであろう。呉観明本などと同版式の『李卓吾先生批評三国志』が呉観明本・緑蔭堂本・藜光楼本以外にも存在していたに違いないからである。（孫楷第『中国通俗小説書目』には「宝翰楼本」という『李卓吾先生批評三国志』が著録されている。）

(14)　この場面を嘉靖本・周曰校本では、曹操の一言が終わらないうちに劉備が驚いて箸を落とし、それと同時に雷が鳴る、となっている。夏振宇本は呉観明本に同じである。つまり、劉備が曹操の一言に驚いて箸を落とすのと雷が鳴ることの順序について、同じ二十四巻系諸本の中でも嘉靖本・周曰校本のように作るもの、夏振宇本・呉観明本のように作るもの、そして毛宗崗本の修訂と、段階的に変化しているのである。このことは鄭振鐸も気づいていないし、またそれ以降の研究においてもあまり省みられていない。

(15)　毛宗崗本の該当部分は次のようになっている。

城上暗放一冷箭、正中孫策左腿、翻身落馬。衆將急救起、還營拔箭、以金瘡藥傅之。策曰令軍中詐稱主將中箭身死、軍中擧哀、拔寨齊起。薛禮聽知孫策已死、連夜便起城内之軍。與驍將張英・陳橫殺出城來追之。